



## 第17回 木村奈保子の 音のまにまに

今回は、SNSのコメントの取り扱いから考えるコミュニケーションのあり方、“真の芸”とは何かについて考えてみた。天才とは破天荒なもの。ゴシップや売名に踊らされることなく、その芸術性や音楽性を理解して大事にしていきたいものだ。

### 下世話なネタに負けないアートを愛したい

世間をお騒がせのコミュニケーションツールのひとつ、LINEを私ももちろん使っている。友人とお笑いスタンプのみのやりとりの日もあるほど、幼稚なやりとりをしていて、仮にこれが世間に知られるとしたら、罪ではないかもしれないが、かなり恥ずかしく、さらされたことを想像しただけで顔が赤くなる。

しかし言葉のやりとりよりは、おだやかな空気で終わることもあり、つくづく漫画の表現力を感じる。ただ、何か言いたいことやテーマが具体的にあるときは、あせって書いてしまい、「それ、誰のこと？何がどうしたって？」と、主語や形容詞の不足をたしなめあうことになり、互いに相手を苛立たせることもある。

しっかりした文章を書くには、冷静な気持ちと客観性が必要だが、そこまで神経を使うなら、メールより安易に交信できるLINEを使う意味はない。

私の周辺は、言葉や文字にシビアな人が多いため、こだわりの意見をはさむと、返さずにはいられない状態になり、夜中でもちょっとした激論となる。友人どうし二人の間の言語でさえ、こうなのだ。

よくわかったのは、お互いの共通言語は、あるようでないということ。顔を見ながら吐く言葉と、見ないで吐く言葉の意味は相当異なるし、互いの置かれた環境、人生の違いでも理解度は異なる。十分わかりあっている仲だと思っても、誤解は常に生じるのだ。

昨今は、ネタがないのか生の取材をしなからか、メディア側が、そのような共通言語を持ちにくい環境にいる素人のブログやSNSのコメントを扱い、あだこうだと騒いでいる。

数行の言葉を発した中に、どれほどの思いがあるのか？ ネットはあくまでつぶやきに過ぎないのであり、独り言ではないのか？ それを勝手に一人歩きさせるマスコミの取り上げ方にも大いなる問題があるし、取材もせずにコメントのあら探し、ネタ探しをする傾向は安易で危ない。

私は、社内の仕事の指示でさえ毎日、本社スタッフにメールでまとめて箇条書きにして送るのだが、間違いが起らないように完璧な指示を書くのは本当に手間がかかる。なぜこんなにも「あれ」が「こ

れ」のことで、「これ」が「あれ」のことと取られるか、言葉のコミュニケーションの難しさを感じずにはいられない。

お互いの仕事についての知識や経験、感覚の相違から、共通言語があるようでないことに気がつくばかりだ。しゃべること、映像を加えること、実際に相手の目を見ることの価値は高いが、それでも生活環境や時代の共通言語がなければ、外国語に近い瞬間を感じることも少なくない。

私が人生の後半で思うのは、講演や雑誌、テレビなどというマスメディアの中で一方的に自分の話を展開してきたが、どれほど伝えたいことが伝えられたのか、共通言語をきちんと想定できたのか、ということだ。とりわけ、テレビのゴールデンタイムなどというお茶の間色が強い枠では、バランスをより重視していた。映画評では、映画ファンでさえない一般人が聞いてもわかる表現が求められるのだ。これが深夜になり、視聴者が限定されると規制はゆるめられ、ネットとなるともっとフリーのはずだ。そういう環境でリラックスして、仲間につぶやくSNSを、簡単にマスコミがマスとして広げてしまうようになると、安心してつぶやけなくなる。物書きが仕事で考慮して書くものとは趣旨が異なるからだ。

もっともSNSの悪用や売名行為など、世の中には信じられない発想を持つ人もいて、マスコミが面白がるからか、なぜかこの種の人が昨今、目立っているのも確か。

私は、芸のない売名行為が最も苦手なひとりだが、負けないように真の芸を目指したい。特に、アーティスト、芸術家にはバランスよりも突飛な発想、理解不能なまでの表現を期待する。下世話なネタで盛り上がる売名行為に負けないアート、芸術が求められる。

大衆は、マスコミとともに、破天荒な天才を理解せず追いやり、代わりに芸のない売名凡人に踊らされる。それでは、文化レベルが下がるばかりだろう。

ゴシップや売名よりも、まず俳優の演技力やミュージシャンの音楽性が高かには高いのは当たり前期待だが、その顔の表情、動き、せりふ使い、音、音、音……その広がり一般解釈などをはるかに超えて、我々を果てしない未知の世界に連れて行ってくれる、そんな芸の深みを私は愛する。



NAHOK INFORMATION [www.nahok.com](http://www.nahok.com)

NAHOKの商品情報は上記のNAHOK Webサイトをチェック！

Fabric from  
Germany,  
Made in Japan



フルートWケースガード「Bullitt/wf」(CH共用/アジャスター付き、ホワイト/ピンク)に木管フルートを収納しているミュンヘン・フィルハーモニー管弦楽団首席フルート奏者のHerman van Kogelenbergさん

